

「今、私の晴雨計は！⑳」

「北という国」2

平 山 征 夫

もう少し私が経験した“北”

と言う国との話をしよう。新潟県知事としては一番の関わりは拉致問題であった。しかも私にはこの問題は県民の安全を守るという知事の責務としてだけではなかった。横田めぐみさんの拉致は、私の五代前の日銀新潟支店長時代に起こった事件で、横田滋さんは当時日銀新潟支店の職員だった。

また蓮池薫さんは私と同じ柏崎高校の後輩にあたる。彼が拉致された柏崎のあの海岸は通称「ア

ベック道路」と言われ、恋人のデートの名所であった。私にはその経験はなかったが、市の中心から極めて近い海岸だ。私にとってこの二つの拉致は他人ごとではなかった。日銀支店長の着任挨拶で訪れた中央警察署の署長室には、捜査本部は解散されていたにも拘らず、めぐみさんの情報提供を求め、ポスターが貼られていた。署長は「あれだけ捜しても見つからない。北朝鮮に拉致されたとして考えられない」と言っていた。まだ北が拉致を認める前のことだ。これが私の拉致問題のスタートであり、北という国の存在を強く意識した最初でもあった。

知事になって五年目の一九九七年、横田さん夫妻が県庁を訪ね

て来られて、「これまではめぐみに危険が及ぶと思いを潜めていましたが、これからは帰してくださいと声を上げてゆくことにしました」と言う。韓国に亡命した元工員・安明進の証言からめぐみさんの拉致被害を確信したからだ。早速支援の第一号の署名をした。ここから横田さんたちの辛く長い闘いが始まった。だが、その闘いは未だ続いている。

拉致問題に動きが出たのは、二〇〇二年の小泉訪朝からで、それがきっかけで五人が帰国した。その中には蓮池さん夫婦のほか認定外だった佐渡の曾我さんが含まれており、本県人三人が帰国した。私は三人の健康チェックを秘かに行うよう指示した。蓮池さん

の話では、外貨ショップの買い物のほか、ピョンヤンで二番目からの病院で治療を受けることが出来たそうだが、歯科のレベルは低く歯は酷い状態だった。曾我さんに病気が発見され、こっそり政府の責任で手術することになった。県庁の近くのレストランで忍びの慰労会を設けた時、北での生活ぶりなど聞かせて貰った。金丸訪朝団が来た時、突然日本映画（キューポラのある街など）が三日続けてTV放映されたが、その後パタッと動きが止まったこと、朝よく家の前を子供さんと保育園に通っていた横田めぐみさんのこと、そしてある日突然一斉に引越させられ、同じ地域に住んでいた拉致被害者がバラバラ

にされ、それ以来会えなかったこと、など……。

二〇〇四年の二度目の小泉訪朝で蓮池さん達の子供さんが帰国したが、曾我さんの夫・ジェンキンスさんの扱いが問題になった。脱走兵だったからだが、交渉の結果ジャカルタでの再会という事になった。ジャカルタに止め置かれたら大変と考えた私は、拉致被害者家族担当の内閣官房参与・中山恭子さんに電話、「県立病院の医師を同行させて下さい。ジェンキンスさんの健康に問題があり、すぐ日本に連れて帰って手術をする必要がある、と言う診断書を書かせますから」と申し出た。中山さんは「国の方で医師は同行させます」とのこと。すると

迎えに行ったジャカルタから中山さんが電話してきた。「大変、貴方が言っていたように日本にすぐ連れて帰らなくてはならない」と言う。「病気は心配であるが日本に来ることになってよかった」と正直思った。でも羽田に降りたったジェンキンスさんはジャカルタの空港に降りた時とは様変わりに極めて元気だった。その姿を見て「そうだ！ジェンキンスさんは北では俳優だったな」と思いつき合点した。

この頃、福田康夫官房長官から電話があり、上京時に寄って欲しいとのこと。行ってみると「新潟は北との関係では特別な県だが、政府として聞いておいた方が良い情報があれば聞かせて欲しい」

とのこと。直感的に「政府は賠償金交渉に入り、国交正常化を目指す方針だな」と感じた私は「もし、賠償金を払うなら、今の政権を延命させる直接支払いはせず、アジア開銀に北朝鮮ファンドを設けそこに払込み、本県のシンクタンク「エリナ」で作成する北朝鮮近代化プロジェクトのファイナンスにのみ活用する条件を付けたらどうでしょう。当然拉致被害者の全員帰国の条件も付けます。人

参をぶら下げるわけです」と申し上げ、エリナでまとめた「北東アジア輸送回廊計画」（この地域の貿易発展のため九つの輸送回廊のインフラ優先整備計画）の説明をした。福田さんは「面白い。今後何か情報や提案があったら、いつ

でも予約なしで飛び込んできてくれ。最優先で逢うので……」とのこと。私は拉致問題解決の具体案としてこの「人参案」を具体化しようとして動き出したが、それからしばらくして福田さんは小泉氏と北を巡る外交方針が合わず、あっさり官房長官を辞任してしまっ

た。馬の鼻づらに人参はぶら下げられなかった。今でも残念に思っている。

この後、自民党の拉致問題の中心は安倍官房副長官が担った。家族会の期待も大きかった。五人の帰国時に残り八人の死亡発表をした福田さんは「冷たい」との評価となってしまうのと対称的。尤も今は二度の総理就任にも関わらず、さしたる進展をみないこ

とからその手腕に家族会等からも少し疑問が出ているが、私は安倍氏には初めから全く期待をしていなかった。それは、事態の改善を期して安倍官房副長官のところに「国連の人権委員会に提訴して貰えないか」とお願いに行った時の対応によるもの。私の要請に対し「国連は二国間で対立している問題は取り上げない。そんなことも知らずに陳情に来たのか」と剣もほろろ、取り付く島もない。この後、家族会や支援団体は数度にわたりニューヨークタイムズ等に意見広告を出した。その結果、国連で取り上げられ、何度も北への改善勧告等が議決されているのは承知の通りだ。

もう一つ、記しておかなければ

ならない北の話がある。北東アジア経済会議には北朝鮮は強い関心を持っていった。北東アジアの成長の船に同乗したいからだ。我々も本国からの参加を呼びかけていた。しかし会議の直前になると欠席となり、朝鮮大学校や友好商社から代理出席があるだけだった。それが横田さんたちが立ち上がった翌年の一九九八年の同会議に对外贸易開放委員会の金正宇委員長が出席したのだ。びっくりするとともに、北の変化への期待に会議は盛り上がった。翌年は日程が合わないのとビデオメッセージが送られて来た。しかし、その翌年の会議には音沙汰なし、そうこうしているうちに賄賂受領の疑いで金委員長は射殺され

たとのニュースが入ってきた。開放政策に軍が待ったをかけたのだった。

北とは色々な関わりがあった。万景号のことで右翼にも襲われた。経済的に行き詰まり国民を自力で食べさせられない国が、核や弾道ミサイルまで開発して脅し外交（「俺を助けないと大変なことになるぞ」）を展開する北は不思議な国だ。普通は頭を下げて助けてくださいと言うべきなのに・・・無視されると益々脅しを強めるが、物事には限度がある。脅しも無視できない段階になってくれば周りはほっておけなくなる。そろそろその段階に差し掛かってきたかなと最近の北の動きを見て危惧を強めている。

そんな折、先日被害者家族会は二十周年を迎えた。めぐみさんが拉致されてからは倍の四十年が経っている。進まない状況に苛立つ家族会では、今年の運動方針に、初めて「今年中に！」と「制裁を緩める戦略も」を打出した。人参作戦は復活するかもしれない。

（平成二十九年三月三十一日）